

令和 3 年 6 月 26 日現在

機関番号：32415

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2020

課題番号：18K13121

研究課題名（和文）子育て支援における倫理的意思決定モデルの開発に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Development of an Ethical Decision-Making Model for Child-Rearing Support

研究代表者

亀崎 美沙子（Kamezaki, Misako）

十文字学園女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：60459592

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、子育て支援における保育士の葛藤の解決モデルを作成するために、1）事例研究、2）文献検討、3）アンケート調査を実施した。

1）では保育士の子育て支援の意識には、母親規範意識と専門職倫理意識が併存しており、葛藤の解決には専門職倫理にもとづく意思決定が必要であること、2）では子ども及び保護者に対する倫理責任として、各8項目を明らかにした。また、倫理綱領の国際比較から、我が国の倫理綱領の課題と展望を考察した。3）ではいずれの葛藤パターンにも同程度に葛藤が生じること、「子どもの保育をめぐる葛藤」が最多であること、倫理知識をもつほど専門職倫理意識が高いことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、実態が把握されていなかった子育て支援の葛藤の内実を明らかにした。また、その解決に必要なとされる「子どもに対する倫理責任」および「保護者に対する倫理責任」を明らかにした。子育て支援の葛藤が生じた際、これらの倫理責任を活用することにより、子どもと保護者のそれぞれに対して、保育士が何をすべきかを明確化し、対応の方向性を導くことが可能となる。さらに、本研究では、他の専門職や諸外国の保育専門職の倫理綱領との比較を通して、保育士の専門職倫理の課題と展望を明らかにした。これらの成果は、今後の専門職倫理の発展および倫理教育プログラムの開発に寄与することが期待される。

研究成果の概要（英文）：In this study, I conducted 1) a case study, 2) a literature review, 3) a questionnaire survey in order to create a model for resolving conflicts among childcare workers in childcare support, and obtained the following results.

1) It was found that childcare workers' awareness of childcare support includes both awareness of mothers' norms and awareness of professional ethics, and that decision-making based on professional ethics are necessary to resolve conflicts. 2) Eight ethical responsibilities to children and their guardians were identified. In addition, from an international comparison of codes of ethics, the challenges and prospects for Japan's code of ethics were examined. 3) It was clarified that conflicts occur in all conflict patterns to the same extent, that "conflicts over childcare" is the most common conflict, and that the more knowledge one had of professional ethics, the higher one's awareness of professional ethics.

研究分野：子ども学

キーワード：子育て支援 葛藤 倫理的意思決定 保育士

1. 研究開始当初の背景

保育士には法律上、子どもの「保育」と「子育て支援」という二重の職務が規定されている。つまり保育士には、子育て支援の実践において、子どもと保護者双方のニーズや意向を尊重し、支援にあたるのが要請されている。このような職務の二重性は、子どもの利益と保護者の利益が衝突する場合に、保育士に葛藤をもたらすこととなる(木曾 2011; 亀崎 2017)。このような葛藤は、保育士個人の力量の問題というよりも、職務の特性上、避けることのできない構造的な問題である。しかしながら、従来の子育て支援研究においては、この点に関する実態把握も、解決の手立ての検討もなされておらず(亀崎 2015)、子育て支援の葛藤への対応は、個々の保育士や各園の判断に任されている現状にある。子育て支援の葛藤は、子どもの利益保障が困難化した場合に生じるものであり、そこでは、いかにして子どもの利益を保障するのが問題となる。

こうした状況において、子どもの利益を保障するためには、専門職倫理にもとづく判断が求められる。しかしながら、保育士は「母親ならば~すべき」といった母親規範意識が高く、それが保護者の養育にも大きな影響を与えていることが指摘されている(高濱 2000; 中川 2003; 神田ら 2007; 神谷 2012; 中谷 2014)。また、子育て支援における保育士の意識には、母親規範意識と専門職倫理意識が併存していることも示唆されている(松木 2007)。母親規範意識は、母親の育児負担感を高め、子育てを困難化させるおそれがあり、その結果として、子どもの最善の利益が損なわれるリスクが生じることとなる。こうした事態を回避するためには、子どもや保護者の権利を保障するための専門職倫理を根拠とした判断が必要となる。しかしながら、そうした意思決定の仕組みは構築されておらず、保育士の倫理教育は養成教育・現職研修も不足している(鶴 2014; 厚生労働省 2016; 谷川 2017)。保育士が専門職として、その実践において子どもの最善の利益を保障するためには、専門職倫理にもとづく葛藤の解決の仕組みを早急に構築する必要がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、1)母親規範意識と専門職倫理の側面から子育て支援における保育士の意識構造を把握し、葛藤パターンを明らかにすること、2)子育て支援の葛藤における倫理的意思決定モデルを作成することにあつた。このことにより、子育て支援の葛藤が生じたとき、子どもの利益を保障することが可能となると考えた。このうち、本研究期間においては、1)を明らかにすることはできたが、新型コロナウイルス感染拡大により、現地調査を実施することができず、2)のモデル作成が困難となった。そこで、現地調査に代えて、文献調査を実施することとし、子育て支援の葛藤に関する先行研究レビューおよび倫理綱領の国際比較を行い、我が国の保育における専門職倫理の課題と展望を明らかにすることを新たな目的として設定した。

3. 研究の方法

研究開始当初には下記(1)~(3)に加えて、保育所等におけるフィールドワークおよびインタビュー調査の実施を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染拡大により、現地調査の実施が困難となったため、研究内容を一部変更し、(2) および(4)を実施した。

(1) 事例研究

子育て支援に関するインタビュー調査から収集された葛藤事例を大谷(2011)による Steps for Coding and Theorization (以下、SCAT)を用いて分析し、葛藤における保育士の意識構造に関する検討を行った。

(2) 保育士の専門職倫理に関する文献検討

子どもおよび保護者に対する倫理責任の検討

保育士の専門職倫理を明らかにするために、保育所保育指針の分析を通して、「保護者に対する倫理責任」および「子どもに対する倫理責任」の検討を行った。

倫理綱領の国際比較

日本の倫理綱領の課題を明らかにするために、日本、アメリカ、デンマークの3か国の倫理綱領について、国際比較を行った。

(3) アンケート調査

2018年12月に「平成30年度保護者支援・子育て支援研修会」「平成30年度保健衛生・安全対策研修会」の受講者を対象としてアンケート調査を実施した。本研修は全国研修であり、保育士等キャリアアップ研修にも指定されている。調査票の配布数は538、回収数は507、回収率は94.2%であった。このうち、保育士資格を保有し、保育所もしくは幼保連携型認定こども園に勤務する保育者383名を分析対象とした。分析にはSPSS Statistic ver.26を使用し、*t*検定、分散分析、多重比較、²検定、残差分析、*U*検定、*H*検定、因子分析等を行った。さらに、KH Coder ver.3を用いて、共起ネットワーク分析、対応分析を行った。

(4) 子育て支援の葛藤に関する先行研究レビュー

子育て支援における保育者の課題や困難が時代とともにどのように変遷してきたのか、また

その過程において、子育て支援の葛藤がどのように議論されてきたのかを明らかにするとともに、1994年のエンゼルプラン以降に発表された子育て支援の課題や困難、葛藤に関する先行研究の検討を行った。

4. 研究成果

(1) 事例研究 (亀崎 2020b)

子育て支援における保育士の意識構造の詳細を把握するために、3名の保育士の葛藤事例について SCAT を用いた質的分析を行った。その結果、保育士の子育て支援の背後には専門職倫理意識と母親規範意識が混在すること、母親規範意識にもとづく子育て支援は、母親の子育てを困難化させるおそれがあることから、保育士自身がこれを自覚し専門職倫理にもとづき実践を行う必要があること、子育て支援の葛藤の解決には、保育士の専門職倫理の具体化と倫理教育が必要であることが明らかとなった。

(2) 保育士の専門職倫理に関する文献検討

子どもおよび保護者に対する倫理責任の検討 (亀崎 2019a; 亀崎 2020a)

保育士の専門職倫理を明らかにするために、保育所保育指針と全国保育士会倫理綱領、全米乳幼児教育協会 (以下、NAEYC) 倫理綱領、社会福祉士の行動規範との比較検討を通して、「保護者に対する倫理責任」および「子どもに対する倫理責任」の検討を行った。その結果、各8項目の倫理責任が保育所保育指針より抽出され、それぞれの定義を作成した (図1)。

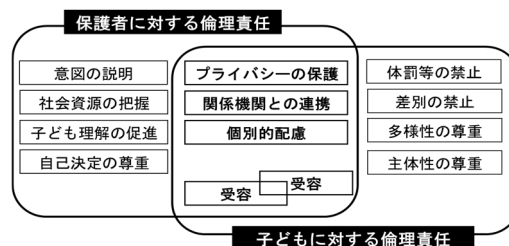


図1 保護者および子どもに対する倫理責任 (亀崎 2020a)

保護者および子どもに対する倫理責任は半数が概ね共通していたが、半数はいずれか一方にのみ

含まれていた。後者の倫理項目の多くは、相手が子どもであっても保護者であっても、その権利を尊重するために必要であると思われる。子育て支援の葛藤が生じたとき、本研究で明らかにした倫理責任を判断の根拠として活用することにより、子どもと保護者に対する対応の優先順位や対応方針を明確にすることができると考えられた。

倫理綱領の国際比較 (亀崎ら 2021)

保育士の専門職倫理の検討の手がかりを得るために、日本、アメリカ、デンマークの倫理綱領について、全体構造、倫理責任の対象、価値・倫理の区分の観点から、比較検討を行った。分析対象は、日本の「全国保育士会倫理綱領」、アメリカの NAEYC 倫理綱領、デンマークの「ペダゴギーの倫理基準」である。分析の結果、全体構造では、NAEYC 倫理綱領が最も体系的かつ具体的に示されているのに対して、全国保育士会倫理綱領は抽象的な大綱のみが示されていること、倫理責任では、NAEYC 倫理綱領は「子ども」「家族」「同僚」「地域や社会」のそれぞれに対する倫理責任が明確であるのに対して、全国保育士会倫理綱領では、これらが混在し内容が不明瞭であること、価値・倫理の区分では、NAEYC 倫理綱領では「中核的価値」と「倫理責任」が明確に区別されているのに対して、全国保育士会倫理綱領と同様に価値・倫理ともに明記がなく、これらの用語も用いられていないことが明らかとなった。

アメリカやデンマークでは、倫理的ジレンマの解決を明確に意図して倫理綱領が作成されているのに対して、日本では専門職としてのアイデンティティの確立や社会的信用の確保に比重が置かれている。このことが、日本の倫理綱領の曖昧さにつながっていると考えられる。また、日本には告示としての保育所保育指針等があり、これが具体的な行動規範として機能していることが考えられる。このことを踏まえれば、保育士が個別・具体的な事例に活用できるよう、倫理綱領との整合性を図り、専門職倫理を体系化していくことが必要であると考えられた。

(3) アンケート調査

子育て支援の葛藤類型および葛藤内容の特性把握 (亀崎 2021b; 投稿中)

子育て支援の葛藤の特徴とその課題を明らかにするために、アンケート調査を実施し、保育士はどの程度、日頃の子育て支援において葛藤を感じているのか (以下、葛藤頻度)、子育て支援の葛藤において、“子どものために” “保護者のために” という思いのうち、いずれに対してより高い比重が置かれているか (以下、葛藤類型)、子育て支援の葛藤はどのような場面や事象によって生じるのか (以下、葛藤内容) 以上3点の検討を行った。

その結果、第1に、葛藤頻度に関する調査結果からは、約7割の保育士が日常的に子育て支援において葛藤を感じており、年齢の高さ、保育経験年数の長さ、生活困窮児保育経験、地域子育て支援担当経験の4項目において、葛藤頻度の高さとの関連が認められた。第2に、“子どものために” “保護者のために” という思いを分析軸として、葛藤事例の類型化を行った結果、葛藤類型の割合は「子ども比重型」が4割強と最も多く、次いで「板挟み型」が2.5割、「困り感」が1割強、「保護者比重型」が1割であった。つまり、保育士自身が子育て支援の葛藤として認識した事例のうち、本研究が焦点化する“子どものために” “保護者のために” との思いの間で板挟みとなり、葛藤が生じていたのは2.5割のみであった。第3に、葛藤事例の分析を通して、葛藤内容を類型化した結果、【子どもの保育をめぐる葛藤】が約半数、次いで【保護者とのかわりをめぐる葛藤】が3割弱、【保護者の養育をめぐる葛藤】および【保育の利用を

めぐる葛藤】が各1割強であった。このことから、子育て支援の葛藤は、保護者とのかわりそれ自体よりも、子どもの保育においてより頻繁に生じていることが明らかとなった。第4に、葛藤類型別にその特徴を検討した結果、「子ども比重型」は【保護者とのかわりをめぐる葛藤】が有意に少ないのに対して、「保護者比重型」では有意に多い結果となった。在園児の保護者に対する子育て支援は、「子ども-保護者-保育者」という三者関係において、日常の保育と一体的に展開されるという特徴がこのような結果につながったものと考えられた（投稿中）。

専門職倫理意識および母親規範意識の実態把握（亀崎 2019b；亀崎 2020b；投稿中）

（1）に示す研究結果からは、子育て支援における保育士の意識には、専門職倫理と母親規範意識が混在していることが示唆された。そこで、（2）で明らかにした「保護者に対する倫理責任」に対する意識（以下、専門職倫理意識）および母親規範意識の実態を把握するために、アンケート調査を実施した。その結果、専門職倫理意識では「プライバシーの保護」および「子ども理解の促進」が最も重視されていたのに対して、「関係機関との連携」の重視度が低かった（表1）。一方、母親規範意識では、「母親は何よりも一番に子どもに感心をもつべき」が最も賛成の度合いが高く、「子育ての責任は父親よりも母親がもつべき」への賛成の度合いが最も低かった（表2）。

調査結果からは、子育て支援において、保育士は保護者倫理をある程度重視しつつも、同時に母親規範意識も有していることが明らかとなった。その背景には、専門職倫理に関する知識不足があり、養成教育・現職教育のいずれにおいても、ほとんど学習機会を有していないことが明らかとなった。また、属性との関連からは、保育経験年数の長さ、特別な配慮を必要とする子どもの保育経験、地域子育て支援経験、専門職倫理知識等が、保育士の専門職倫理意識の高さと関連することが明らかとなった（投稿中）。

葛藤パターンの特性把握（亀崎 2020c；亀崎 2020d）

上記の結果を踏まえ、専門職倫理意識と母親規範意識の2軸により葛藤パターンを4つに類型化し、各パターンの特性を検討した。因子分析によりこれら2つの意識について情報を集約し、それぞれの意識の高-低の組み合わせにより、パターンA（倫理H-規範L群）、パターンB（倫理H-規範H群）、パターンC（倫理L-規範H群）、パターンD（倫理L-規範L群）に類型化した。さらに、各パターンの葛藤の質的特徴を把握するために、KH Coder ver.3を用いて、葛藤事例の記述内容を分析した。特徴語の抽出、共起ネットワーク分析、対応分析（図2）を行った結果、その特徴は図3のように集約された。

以上の分析結果からは、子育て支援の葛藤はどの葛藤パターンにおいても同程度に生じること、小規模園ほど専門職倫理にもとづく実践が行われやすいこと、「地域子育て支援担当経験」や「指針倫理知識」が保育者の専門職倫理意識を高めることが示唆された。

（4）子育て支援の葛藤に関する先行研究レビュー（亀崎 2021a）

先行研究レビューの結果、以下の点が明らかとなった。第1に、子育て支援の課題や困難に関する研究は、2008年の保育所保育指針告示化以降に登場していた。その内容は、子育て支援業務の負担を示すものから、実践上の課題の解決をめざすものへと変遷していた。こうした流れの中で、子育て支援の葛藤に関する研究は、後者の課題解決に向けた研究のひとつとして位置づけられた。第2に、子育て支援の葛藤に関する先行研究は、少数の事例研究による仮説生成の段階にあり、量的調査による実態把握や解決の手立てに関する検討はなされていなかった。第3に、子育て支援の葛藤に関する検討課題として、量的調査による実態把握、解決の手立てとして

表1 専門職倫理意識

| | N | M | SD |
|-----------|-----|------|------|
| プライバシーの保護 | 381 | 3.93 | .291 |
| 子ども理解の促進 | 382 | 3.76 | .466 |
| 受容 | 375 | 3.08 | .663 |
| 個別的配慮 | 377 | 3.02 | .745 |
| 意図の説明 | 377 | 2.86 | .677 |
| 社会資源の把握 | 377 | 2.72 | .715 |
| 自己決定の尊重 | 378 | 2.63 | .667 |
| 関係機関との連携 | 377 | 2.08 | .739 |

表2 母親規範意識

| | N | M | SD |
|------------|-----|------|------|
| 子どもに一番に関心 | 382 | 3.21 | .665 |
| 自分より子ども優先 | 380 | 2.72 | .702 |
| リフレッシュ保育反対 | 381 | 2.04 | .710 |
| 三歳児神話 | 382 | 1.88 | .785 |
| 母親育児責任 | 381 | 1.83 | .687 |

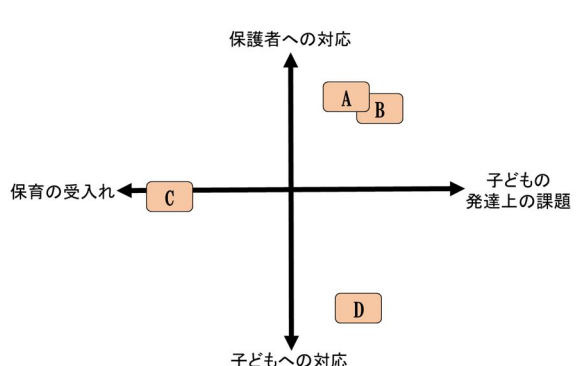


図2 対応分析結果

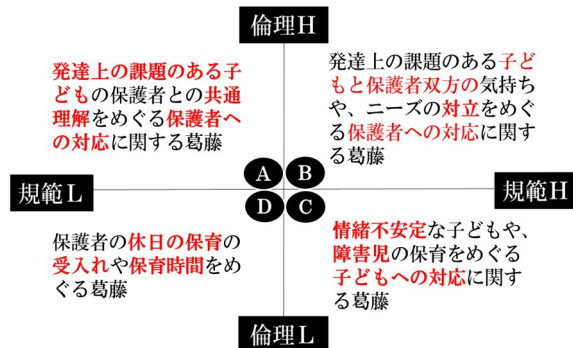


図3 各パターンの葛藤内容の質的特徴

の専門職倫理の明確化、倫理教育の検討、解決モデルの提示等が必要であると考えられた。

以上の研究成果に加えて、研究開始当初の計画では、パターン A (倫理 H - 規範 L) の意思決定のプロセスを明らかにし、倫理的意思決定モデルの作成を予定していた。しかしながら、新型コロナウイルス感染拡大により、現地調査を実施することができなかった。そこで、2021 年度以降、新たに科研費 (基盤 C) を獲得し、引き続き子どもの最善の利益を保障するための倫理的意思決定モデルの構築に取り組むこととした。

< 引用文献 >

- 亀崎美沙子 (2015) 「保育相談支援の困難性に関する要因の検討 - 保育所保育士の感じる保護者とのかわりの難しさを手がかりに - 」 『第 1 回サクセス保育・幼児教育研究懸賞論文』
<https://www.like-kn.co.jp/wp/wp-content/uploads/2015/05/kamezaki.pdf>
- 亀崎美沙子 (2017) 「保育士の役割の二重性に伴う保育相談支援の葛藤 - 親・子の相反ニーズにおける子どもの最善の利益をめぐって - 」 『保育学研究』 55 (1), pp.68-79
- 亀崎美沙子 (2019a) 「子育て支援における保育者の専門職倫理の検討 - 『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』を手がかりに - 」 『日本保育学会第 72 回大会発表論文集』 P-655 - P-656
- 亀崎美沙子 (2019b) 「子育て支援における保育者の専門職倫理意識の実態」 『日本子ども家庭福祉学会第 20 回全国大会抄録集』 pp.50-51
- 亀崎美沙子 (2020a) 「保育所における子育て支援に関する保育士の専門職倫理 保育所保育指針における保護者および子どもに対する倫理責任に着目して - 」 『保育者養成教育研究』 4 , pp.23-33
- 亀崎美沙子 (2020b) 「子育て支援の葛藤における保育士の意識構造 - 保育士の語りの質的分析から - 」 『十文字学園女子大学紀要』 50 , pp.85-97
- 亀崎美沙子 (2020c) 「子育て支援における保育士の意識パターンとその特性 - 専門職倫理意識と母親規範意識に着目して - 」 『日本保育学会第 73 回大会発表論文集』 P-1019 - P-1020
- 亀崎美沙子 (2020d) 「子育て支援における葛藤の質的特徴 - 葛藤事例の計量テキスト分析から - 」 『日本保育者養成教育学会第 4 回研究大会プログラム・抄録集』 p.130
- 亀崎美沙子 (2021a) 「保育士の子育て支援の葛藤に関する先行研究の到達点とその課題 - 子育て支援の課題および困難を手がかりに - 」 『十文字学園女子大学紀要』 51, pp.81-94
- 亀崎美沙子 (2021b) 「子育て支援における葛藤の類型とその課題 - 保育士のとらえる葛藤事例の分析から - 」 『日本保育者養成教育学会第 5 回研究大会プログラム・抄録集』 p.110
- 亀崎美沙子・中谷奈津子 (2021) 「保育士の倫理的判断の根拠としての専門職倫理とその課題 倫理綱領に関する国際比較から - 」 『日本保育学会第 74 回大会発表論文集』 P-469-470
- 神谷哲司 (2012) 「保育現場における『対応の難しい親』はなぜ産み出されたのか? - 家庭支援、保護者対応に関する研究動向からの一考察 - 」 『Asian Journal of Human Services』 3, pp.1-15
- 神田直子・戸田有一他 (2007) 「保育園ではぐくまれる共同的育児観 - 同じ園の保育者と父母の育児観の相関から - 」 『保育学研究』 45(2), pp.146-156
- 木曾陽子 (2011) 「『気になる子ども』の保護者との関係における保育士の困り感の変容プロセス - 保育士の語りの質的分析より - 」 『保育学研究』 49(2), pp.84-95
- 厚生労働省 (2016) 「調査研究協力者会議における議論の最終取りまとめ - 保育士のキャリアパスに係る研修体系等の構築について - (参考資料)」
- 松木洋人 (2007) 「子育てを支援することのジレンマとその回避技法 - 支援提供者の活動における『限定性』をめぐって - 」 『家族社会学研究』 19 (1), pp.18-29
- 中川薫 (2003) 「重症心身障害児の母親の『母親意識』の形成と変容のプロセスに関する研究 - 社会的相互作用がもたらす影響に着目して - 」 『保健医療社会学論集』 14 (1), pp.1-12
- 中谷奈津子 (2014) 「地域子育て支援拠点事業利用による母親の変化」 『保育学研究』 52(3), pp.9-21
- 大谷尚 (2011) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 - 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き - 」 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学)』 54 (2), pp.27-44
- 高濱裕子 (2000) 「子どもをめぐるとの大人の役割と関係の認識 - 幼稚園教諭と母親の比較から - 」 『保育学研究』 38 (1), pp.28-35
- 谷川友美 (2017) 「子育て支援者 (サポーター) が考える職業倫理の原理に関する研究 - 子育て支援員研修カリキュラム参加者へのアプローチから見えるもの - 」 『別府大学短期大学部紀要』 36 , pp.31-37
- 鶴宏史 (2014) 「第 2 章 保育ソーシャルワークにおける価値と倫理」 日本保育ソーシャルワーク学会編 『保育ソーシャルワークの世界』 晃洋書房, pp.11-20

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 亀崎美沙子 | 4. 巻 4 |
| 2. 論文標題 保育所における子育て支援に関する保育士の専門職倫理 - 保育所保育指針における保護者および子どもに対する倫理責任に着目して | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 保育者養成教育研究 | 6. 最初と最後の頁 23-33 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 亀崎美沙子 | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 子育て支援の葛藤における保育士の意識構造 - 保育士の語りの質的分析から - | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 十文字学園女子大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 85-97 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 亀崎美沙子 | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 保育士の子育て支援の葛藤に関する先行研究の到達点とその課題 - 子育て支援の課題および困難を手がかりに - | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 十文字学園女子大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 81-94 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 亀崎美沙子 |
| 2. 発表標題 子育て支援における保育者の専門職倫理意識の実態 |
| 3. 学会等名 日本子ども家庭福祉学会第20回研究大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 亀崎美沙子 |
| 2. 発表標題 子育て支援における葛藤の質的特徴 - 葛藤事例の計量テキスト分析から - |
| 3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第4回研究大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 亀崎美沙子 |
| 2. 発表標題 子どもの理解と援助の専門性を活用した子育て支援 - 子どもの姿の伝達に関する研修プログラムを手がかりに - |
| 3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第3回研究大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 亀崎美沙子 |
| 2. 発表標題 子育て支援における保育者の専門職倫理の検討 「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」を手がかりに - |
| 3. 学会等名 日本保育学会第72回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 亀崎美沙子 |
| 2. 発表標題 子育て支援における保育士の意識パターンとその特性 - 専門職倫理意識と母親規範意識に着目して - |
| 3. 学会等名 日本保育学会第73回大会 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 亀崎美沙子 |
| 2. 発表標題 子育て支援における葛藤の類型とその課題 - 保育士のとらえる葛藤事例の分析から - |
| 3. 学会等名 日本保育者養成教育学会第5回研究大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 亀崎美沙子・中谷奈津子 |
| 2. 発表標題 保育士の倫理的判断の根拠としての専門職倫理とその課題 - 倫理綱領に関する国際比較から - |
| 3. 学会等名 日本保育学会第74回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 矢萩恭子編著、亀崎美沙子・鶴宏史・佐藤まゆみ・西智子 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 中央法規出版 | 5. 総ページ数 19 |
| 3. 書名 『保育士等キャリアアップ研修テキスト第6巻 保護者支援・子育て支援（第2版）』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 橋本真紀・山本真実編著、亀崎美沙子・山屋春恵・鎮朋子・水枝谷奈央・徳永聖子・橋詰啓子・金森三枝・熊井利廣・寺村ゆかの・大和田明見 | 4. 発行年 2019年 |
| 2. 出版社 全国社会福祉協議会 | 5. 総ページ数 24 |
| 3. 書名 『最新保育士養成講座第10巻 子ども家庭支援 - 家庭支援と子育て支援 - 』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

亀崎美沙子「シリーズ研究の動向56：子育て支援における保育士の葛藤と専門職倫理」『日本家政学会誌』72(2)，pp.43-49

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|